

資料室だより 156

聖書2冊を本科生寄付金によって購入しました。

聖書協会共同訳、2018年版という日本語としては最新ヴァージョンの聖書（旧約聖書続編付き）と七十人訳ギリシャ語聖書「詩編」を購入しました。

エキュメニズムの証となった新共同訳が出版されてから20年がたち、その後の学問上の進展や日本語の完成度の観点から新翻訳が出されました。聖書というのはイスラム教や仏教と違って初めから翻訳が前提になっています。そして翻訳は各国においてもたえず進展していくものです。この新訳は典礼での朗読にもふさわしいよう格調の高さをめざしています。148名の翻訳協力者がおられますが、音楽学の者にとって残念なのは楽器の名称に関していまだにヘブライ音楽学者の研究は視野に入っておらず、打楽器と弦楽器の混同がみられます。旧約聖書は音楽文献としての価値もあります。新約聖書は教会音楽の霊的指針となる思想が入っています。皆さんも一度音楽の観点から、特に旧約聖書の楽器や神殿奏楽に関して、聖書を読み直してみてもはいかがでしょうか。

もう一冊は「詩編七十人訳ギリシャ語聖書」、秦剛平訳（青土社）

LXX、または七十人訳聖書という名称をお聞きになったことはあるでしょうか。旧約聖書の最も古いギリシャ語訳です。ラテン語訳聖書、ヴルガータもこれを底本に用いていますので、典礼音楽に携わる皆さんはご存知のようにヴルガータ訳詩編はLXX（セプトゥアギンタ）とマソラテキストからの翻訳とを並列しています。セプトゥアギンタは他の翻訳への底本をしても意味を持ちます。ヒエロニムスのようにヘブライ語と両方から訳した人もおりますが。

日本語訳の詩編にはところどころ脚注のように「セラ」という謎の言葉がついています。セラとヒガヨン・セラは用語の意味が不明のままでしたが、この70人訳では「ディアプサルマ」とはっきり書いてあります。つまり節と節のあいだの楽器の間奏です。詩編はプサルテルイムの伴奏で歌うものですがこのようにしばしば間奏が入っていたことを知るとイメージが広がります。この書はヘブライ語との齟齬も細かく解明してすべて注釈がついていますので大変勉強になります。聖書の日本語訳とヴルガータの訳の違いに気づかれている方もおられると思いますがマソラテキストから訳出された日本語の新共同訳と自由に意訳もいとわないギリシャ語訳との隔てを解説してくださっているのは大変ありがたいことです。